



蒲郡クラシックホテル
(旧蒲郡プリンスホテル、蒲郡ホテル)

「特集」… 4

ホテル建築からみた 書籍の情報と時代性

神戸女子大学 家政学部・家政学科 教授 砂本文彦

景観と歴史のはざままで

学部生のころ、研究室で愛知県蒲郡市の都市景観について考える機会が与えられた。地形や緑地、街路、家並みなど、様々な要素に整理をしていくのだが、突出した存在感を放つ建造物があった。それは蒲郡プリンスホテル（現・蒲郡クラシックホテル、旧蒲郡ホテル）だった。三河湾に面す小高い山の上に聳えつつ和風の外観をもった洋式のホテルである。

当時の景観学では、即物的な（モノ）からワンランク上の（メタ）な要

素に格上げするのがスマートだった。蒲郡プリンスホテルもあえて言うなら、ケビン・リンチが『都市のイメージ』の中で示したランドマークに近い。どこからでも視認でき、もし蒲郡から失われるとしたら、市民に喪失感が生まれる。しかし、これを景観的に整理しようとしても、思うようにいかない。三河湾に浮かぶ竹島と対をなしてその存在は圧倒的なのだが、もともと蒲郡の地域性を反映したものではないため、うまくはまらないのである。むしろ、ここは素直にホテルの歴史を読み解くことでその固有性に近づこうとした。



砂本文彦
(すなもと・ふみひこ)
神戸女子大学家政学部教授。1997年豊橋技術科学大学大学院修士課程修了。2001年東京大学・博士(工学)「近代日本における国際リゾート地開発の史的探究」日本学術振興会特定国派遣研究者(韓国)等を経て現職。単著に『近代日本の国際リゾート一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』(書局社、2008年、日本観光研究学会賞・建築史学会賞受賞)、『図説ソウルの歴史 漢城―京城―ソウル』(河出書房新社、2009年)。共著に『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』(ナカニシヤ出版、2014年)、『近代日本の空間編成史』(思文閣出版、2017年)等。

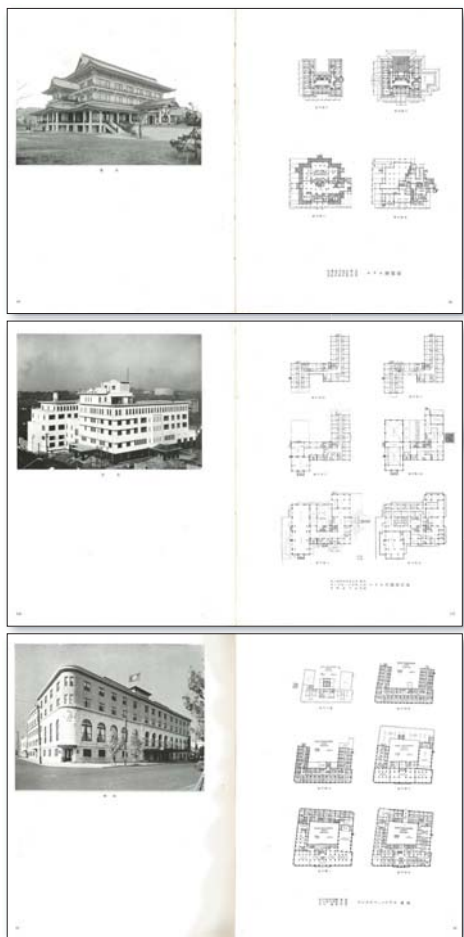


『近代日本の国際リゾート一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』砂本文彦 書局社 2008年

ホテルの 建築意匠がもつ意味

ホテルは1930年代の国際観光政策によってできたことがわかった。建築学を修める私は身構えた。独特の外観から、あの「帝冠様式」を思い浮か

『ホテル建築図集』
清水組編 清水組、1936年



べてしまったからである。

「帝冠様式」は西洋式の建物躯体の上に和風の瓦屋根を大々的に載せたデザインなのだが、それは戦前の日本において、建築家の「国家主義への迎合／付度」により生まれたともいわれた。蒲郡プリンスホテルも、西洋式の躯体の上に日本建築の屋根がのついている。

建築学というのは不思議な学問で、あの当時の理解において、白いコンクリートの箱のモダニズム建築を志向することは清廉潔白で正しく、一方で、和風の大屋根を載せた「帝冠様式」は退廃的というような、道徳的価値判断が潜んでいた。一学生の私にも、その刷り込みは及んでいた。

1930年代 国際観光政策による 国際観光ホテル

1930年代の国際観光政策でつくられた「国際観光ホテル」は、調べてみると全国に15もあつた。となると、15のホテルはどのような姿をしているのだろうか。『ホテル建築図集』（清水組編、1936年）にはそのうち6つのホテルが掲載されていることがわかり、さっそく探し出して手にしてみた。装丁は豪華で、図集とあつて外観や内観の写真、平面図が掲載されている。ホテルは清水組（現在の清水建設）の設計か施工によるものだということから、施主や企業家に施工物件を紹介する図集なのであろう。「国際観光ホテル」を求めて頁をめくると、新大阪ホテル、名古屋観光ホテル、ホテルニューグランドといった都市ホテルは、クラシカルな要素を盛り込んだ近代的な建物、志賀高原温泉ホテルは欧州にありそうな山小屋風、唐津シーサイドホテルは巨大な海の家だった。結局、「帝冠様式」とおぼしき蒲郡ホテルと同系統の外観だったのは、琵琶湖ホテ

ルだけである。拍子抜けした。つまり、これら国際観光政策全体を徹底するような建築表現にいわゆる「帝冠様式」は採用されていないのである。蒲郡に適した様式として選択されていただけである。

むしろ、私の方が建築学の陥穽にはまっている。あらためて国際観光ホテルという枠組みから、そしてホテル建築の近代性を研究する必要性を強く感じ取った。それは観光政策を通じた建築の歴史研究になるだろうとも思えた。

戦前のホテル社史の 少なさとそこから 得られたヒント

戦前のホテルに関する記録は、小冊子類や雑誌記事が大半だった。大部の著作は戦後になって出版されている。戦前に社史という形で発行されたのは、目立つのはふたつしかない。それは富士屋ホテルの社史である『回顧六十年』（山口堅吉編、富士屋ホテル、1938年）と、名古屋ホテルも経営していた大阪ホテルの社史と位置づけられる『ホテルの想ひ出』（下郷市造著、大阪ホテル、1942年）である。

『回顧六十年』は、日本のリゾートホテルの源流のひとつである富士屋ホテルと箱根の歴史を年代記的に追うことができる。さらに、外国人専用ホテルとしての歴史があったため、そのまま日本の外客誘致について知れる資料となっている。同時に図版や来訪者に関する記録もよく記されている。1930年代の国際観光政策の歴史を把握するうえで豊かな基本情報を提供してくれ、なおかつ、西洋人に向けたホテル建築を考えるに示唆が極めて多い。それは要約すれば、①洋式という生活スタイルを日本で成立させる問題、②インフラや建築設備といった近代化への課題、③彼らのエキゾチックな旅情を満たすための空間形成のありかたであった。おそらく箱根で蓄積された個々の取り組みが後に具体的なかたちとなったのが、1930年代の国際観光ホテルの建築群だったといっても過言ではない。実際、1930年代の国際観光政策によるリゾート地形成とホテル建築を研究していくと、幾度となく富士屋ホテルの試みの再来を垣間見ることができる。

『ホテルの想ひ出』は、明治・大正期の大阪を代表した都市ホテルだった大阪ホテルがその経営を閉じる際にまとめられた記録である。支店の位置づけにあった名古屋ホテルの記述も含んでいる。こちらは年代記というよりは、会社解散時点の状況を含み編集されており、読み込みには明治から昭和初期までの大阪と名古屋の都市状況を理解しないとイケない。だが、要はここに記されているのは、明治から昭和初期までに都市ホテルに求められた機能やステイタスが、都市の成長にともない時々刻々と変化し、迎賓館的要素を持ち得た都市ホテルの役割も新たな別のホテルにとってかわった、ということである。そのかつての位置にいたのが、大阪では大阪ホテル、名古屋では名古屋ホテルであったが、とってかわった新たなホテルが、1930年代の国際観光政策と深くかかわりをもって開業した新大阪ホテルと名古屋観光ホテルだった。しかも両者とも、帝国ホテルが関与したホテルである。これと同時にビジネスパーソン向けの宿泊機能に特化したホテルもこの頃に多く新設されており、歴史だけある都市ホテルでは、中途半端な位置におさまらざるを得なかった。

つまり、戦前期に発行されたふたつ

『回顧六十年』
山口堅吉編、富士屋ホテル、1938年

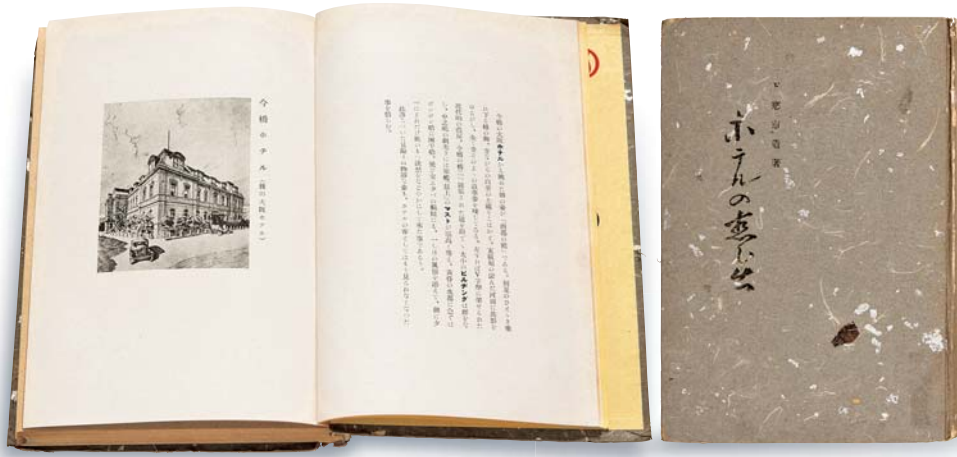


しかないホテルの社史は、日本のリゾートホテルと都市ホテルの展開と消長を歴史的に示しているのである。それは、どのような意味があるのだろうか。

戦前の都市ホテルとリゾートホテルの新設数

ここで目安として、わが国における近代期のホテル新設数の推移を図1に示す。『日本ホテル略史(運輸省、1946年)』に掲載されたホテル名をカウントし、同書に漏れていると思われる洋式設備を備える宿泊施設も他文献





『ホテルの想ひ出』
下郷市造、大阪ホテル、1942年

より適宜補ってカウントしている。新設ホテルの総数は実線で、都市ホテルとリゾートホテルはわけてヒストグラムで示した。

これを見ると、ホテルの新設数は明治期から大正にかけて、新設が集中する時期としない時期を繰り返して、四つの時期に増加傾向があったことが認められる。これはホテル新設ブームとも呼ぶうる時期と考えられる。

- 一期 一八七〇年～七八年
- 二期 一八八五年～九六年
- 三期 一九〇六年～一六年
- 四期 一九二七年～四〇年

そして、この増加の波は四期に大きくなるとなり、1920年代後半から1930年代後半にかけては急速に新設ホテル数が増加していたことがわかる。また、ホテルの種別で見ると、一期には都市ホテルの割合が多いが時代が下るにつれてその割合は減少する。反対に四期に近づくほど、リゾートホテルの割合が増えている。とくに四期のなかでも1930年代後半は、都市ホテルよりもリゾートホテルの方が圧倒的に多い。中国戦線など対外関係の厳しい時期に、国内のホテル業界は質的に変化した（ホテルブーム）を迎えたのである。

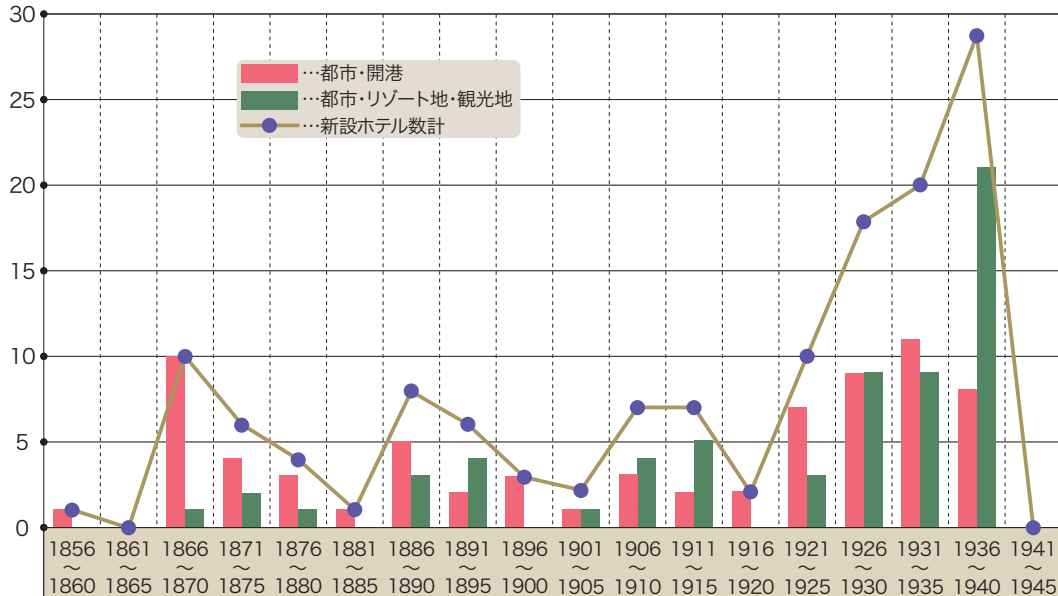
本稿で扱った三つの書籍はどうだろ

う。いずれも、その1930年代後半以降に出版されている。『回顧六十年』は、富士屋ホテルの増築となる花御殿竣工や河口湖畔の

富士ビューホテルの開業（いずれも1936年）といった施設拡充の果ての1938年に発行されたものである。その出版は図1にて示したように、1930年代後半の全国的なリゾートホテルの増加のただなかの出来事である。『ホテルの想ひ出』は1942年に発行されたが、会社解散に際しまとめられた内容は1930年代後半の既存の都市ホテルの置かれた厳しい状況を反映している。『ホテル建築図集』は1936年に清水組により発行され、さらにホテル建設を担って戦前の建設会社をなかもつともホテルを建設したと考え

らえる。この三つの書籍の発行時期は、ホテルの新設の状況を内容的に説明している図書にもなっている。

図1 ホテルの新設状況 (1858年～1944年)



書籍の情報と時代性

2008年に拙著『近代日本の国際リゾート 一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』（青弓社）を出版したが、出版当時は、日本が外客誘致政策を進めて現在のよう多くの外国人観光客を迎えるようになるとは思いませんでした。拙著の内容は建築学的に主要な課題とも思えず、観光学にも貢献するとも考えられず、実は書籍化も時間を要した。日本がこのような状況になるのだったら、正直なところ、歴史の編集の仕方も異なってくる。これも調べて、ああ書いておけばよかった、と思うが後の祭りである。

古書は与えてくれる情報は膨大、かつ、同時に示唆に富む。示唆は、その古書が世に問われた時代も読み解くことで、より内容が増し、かつ意図する方向性も見えてくる。さらに、読み込んでいる自分自身の状況も、これに関わる。目の前に記された情報の取捨は読者に委ねられていて、古書を手に見えてくるのは、実は自分自身置かれた時代性だと、いまさらながら思うのである。古書はいつも、新しい。



社史というと、その会社のことしか載っていないもの、しかも一般には流通していないため、手に入りくいものといったイメージがあるかもしれませんが、実は観光史をひもとくことができる貴重な資料なのです。当館には320冊ほどの社史があります。内訳は運輸関係のものが約170冊と、観光産業関連のものが約80冊。残り70冊が観光行政や一般の企業のものになります。例えば『The History of the Imperial Hotel』『南満州鉄道株式会社三十年略史』などが挙げられます。

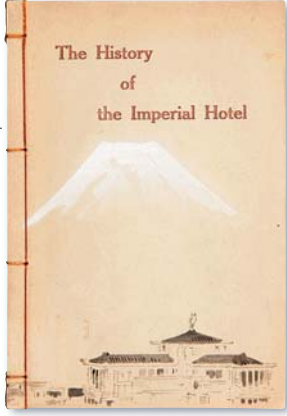
ほとんどの社史は本編と資料編で構成されています。本編は基本的に時系列に並んでいるので、時間がないときは途中から必要な箇所だけを読み進めていくことができます。本編より先にまずは資料編へ、という調べ方もあります。資料編には会社の様々なデータがわかりやすく図表や写真で示されて、年表や索引があ

る場合も多く、本編以上に分かりやすい場合もあるからです。特に年表は自社だけの歴史はなくて、その時代の世の中の動き、風俗・文化などが書かれている場合もあります。同じ会社で10年、50年、100年と周年ごとに出版されている場合、周年版ごとに詳細に書かれている内容が違っていたりします。また、同業種の

社史利用のススメ

観光文化情報センター
司書 泉佳奈

社史を比較してみるもの面白いものです。社史も、その時代、それぞれの会社のカラーが色濃くできるので、同じ出来事が異なる観点で描かれている場合が多いのです。最近では会社のことはホ



『The History of the Imperial Hotel』
Imperial Hotel, 1938年

ームページでわかるように思いがちですが、最新情報が多く、「沿革」で簡単に歴史を紹介しているパターンがほとんど。社史はそれなりに予算と労力をかけて作られているので、インターネットでは見つかからない情報がぎつと見つかります。社史に興味があれば、社史だけで19000冊を所蔵している「神奈川県立川崎図書館」や、渋沢栄一に関連する社史1500冊分のデータが検索可能な「渋沢社史データベース」もおすすめです。当館では40周年事業として更なる社史の収集を予定しています。ご寄贈もお待ちしております。

※ 社史とは
「企業が自社の歴史を、社内資料に基づいて、会社自身の責任において刊行したもの」
～村橋勝子『社史の研究』ダイヤモンド社、2002年より

参考文献



『日本ホテル略史』
運輸省鉄道総局業務局観光課、1946年



『ホテルと共に七十年』
大丸徹三、展望社、1964年



『続日本ホテル略史』
運輸省欧米部、1949年